

シュワルツシルドと日本の天文学統

山本一清

シュワルツシルドが近代のドイツ天文学界における奇才であったことは一般の人々の認めるところであつて、少年の頃から数学に長じると共に、大学に入る以前から天体の軌道決定に関する幾つかの研究論文を専門的なナハリヒテン誌に発表し、人目をひいたが、二〇才の時、ミュンヘン大学に入つて、当時のドイツの天文学界の一重鎮であつたゼーリガーの指導を受けるにいたりシュワルツシルドの才能はさらに一段と飛躍し、その後、クフナー、ゲツチンゲンの両天文台に台長として歴任したが、ついには天体物理学の中心であるポツダム天文台の創立者であり、初代の台長であつたフォーゲルの後を継いで、第二代の台長に推薦された。時に彼は三六才であつた。かようにして、国内も国外も共に彼の将来を大いに囑望したのであつたが、たまたま第一次世界大戦が勃発し、彼は西部戦線上の一氣象台長として活躍中、壮烈な戦死（一九一六年）をとげたのである。

シュワルツシルドがゲツチンゲン大学の教授であり、同天文台長であつた時代に、日本から京都帝国大学の助教授新城新蔵があたかも一九〇六年にこの大学に留学したのであつた。新城は元來が地球物理学の専攻者であつたけれど、ゲツチンゲン大学内におけるシュワルツシルドの高い声望に魅せられて、天文学に非常な興味を覚え、一九〇八年に京都に帰任して教授となるや、まもなくゲツチンゲン市の天文器械会社ザルト

リウスで製作した最大型の口径一八センチ屈折赤道儀その他を購入し、一九一〇年にこれをいれる四メートルのドームを建てた。これが京都大学天文台の初めである。この一九一〇年はかのハレー大彗星が現われた記念すべき年であり、またこの年に山本一清がまだ天文学の講座のない京都大学に入学し、新城の下において、力学や地球物理学を学びつつ、天文学への途を独走したのであった。こうした理由で、京都大学の天文学はゼーリガー↓シュワルツシルド↓新城↓山本という学統を引いているのであって、東京の天文学が創立の当初から国家社会主義的な基本（位置）天文学であるのに対し、京都のそれは、自由新進の天体物理学を本領とするものである。

カール・シュワルツシルドは一九一六年に戦野に歿したが、その一子マルチン・シュワルツシルドはやはり天文を専攻しつつも、一九三七年、ヒトラーのドイツから逃れて、アメリカに渡り、ハーバード大学で数年間研學した後、プリンストン大学天文台に入った。一九三七年の夏、山本一清は南米の日蝕観測からの帰途、アメリカに立寄り、ボストンにおいてマルチン・シュワルツシルドと一夕晚餐を共にして、カール・シュワルツシルド↓新城の学統を^{しの}偲んだことがある。

- 『四十八人の天文家』（一九五九年六月号、恒星社厚生閣）所収。
- 収録にあたり旧字は新字に、旧かなは新かなに改めたが、一部の漢字は旧漢字のままにした。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- カタカナ書きの人名・地名については、通行の表記にあらためた。
- 「」は編者の註である。
- PDF化にはL^AT_EX_{2_ε}でタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。